

「では、これらのことについて何と言ったらよいか(マ 8:31)。「これらのこと」とは、「(霊は)万事が益となるように共に働くこと(8:28)」。これが神の御心(8:29)。

しかし実際の経験としては、迫害や艱難、誘惑や混乱が無くなるわけではない。とはいえ究極的には、「神がわたしたちの味方であるならば(8:31)」、いかなる状態も「わたしたちに敵対できようがない(8:31)」という力強い訴え。

「神が味方である」とは、どういう意味か。「主はわたしの味方、わたしは誰を恐れよう(詩編 118:6)」。神に味方してもらうために、私たちが何かしなければならぬのか。

神のように君臨する王や権力者ならば、ひれ伏して恭順する必要がある。だが詩人は語る。「君侯に頼らず、主を避けどころとしよう(118:9)」。

あるいは職場や学校や共同体に加えられるためには、一定の基準を満たす必要がある。しかし詩人は語る。「人間に頼らず、主を避けどころとしよう(118:8)」。真綿で首を絞めるように、世がつきつけてくる条件や同調圧力に、私は操作されない。「人間がわたしに何をなしえよう(118:6)」。

神に味方していただくために、私たちが神の味方にならねばいかんのか。悔い改め、神を讃美し、御言葉に従わねばならぬか。

忠実になれるならば、そのままでもいい。だがそれで神の歓心が得られるわけではない。神は人情にほだされない。ではなぜ、神は、私たちの味方になったのか。

神が私たちの味方であることは、信仰者の確信でもなければ、宇宙的な命の原理でもない。世において起こったあの出来事がそれを示している。

「わたしたちすべてのために、その御子を惜しまず死に渡された(マ 8:32)」御業によって、神が私たちの味方になった。御子なる十字架の死は、父なる神の、尋常ならざる「わたしたちすべてのための」愛によるものであった。

この愛によって、神が私たちの俗なる側で味方になった。私たちが神の側に行って、聖なる領域で味方にしてもらったのではない。

世に生きる私たちは、四六時中いろいろなものに揺さぶられている。人間的な頑張りで何とかなるものなら一生懸命それに応ずればいいが、不運という諸力、幸運という諸力、偶然という諸力には手も足も出ない。これらの諸力が、私たちが信ずる「神の愛の確かさ」を脅かす。

ただ次のことは肚の底でしっかり覚えておきたい。「死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできない(8:38~39)」。

「もし神がわたしたちの味方であるならば(8:31)」。これを書いたパウロは、世間的に見れば「神が味方」などと言える筋合いではない。教会を激しく迫害し、キリストと神に敵対していたのだから。

そんな世間体に押しつぶされず、パウロは胸を張って言う。「敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、御子の命によって救われるのはなおさら(5:10)」だと。

「主はわたしの味方(詩編 118:6)、苦難のはざまから主を呼び求めると主は答えてわたしを解き放たれた(118:5)」。神の愛から私たちを引き離すことはできないゆえに(マ 8:39)、何事からも解き放たれる。



《おまけのひとこと》

神が味方なら 権威や権力は私を縛りえない 競争原理や誘惑は私を縛りえない (詩編 118:8~9)
神は私を解き放つ(118:5) 極寒のしるべなき沃野に 道はなく 茫漠とした荒野に 解き放つ